研究ノート

大学生の通訳の授業に対する志向に関して

Undergtaduate Students' Intentions Regarding Interpreting Classes

高　橋　絹　子
Kinuko Takahashi

The present study was designed to explore undergraduate students' intentions regarding interpreting classes. According to the two surveys conducted with educators in charge of interpreting education at universities (Someya et al. 2005, and Takahashi et al. 2022) their top purpose of education was not to train would-be interpreters but rather to increase students' English proficiency. It is not certain whether the students themselves are aware of this prevailing teaching policy for interpreting classes. Therefore, in order to determine students' intentions, interviews were conducted with two groups of students majoring in English: students taking an interpreting class and students not taking one. The students were asked about the reasons behind their intention.

It was revealed that students thought that interpreting classes were only intended to train would-be interpreters and unless they want to become an interpreter, the classes are not relevant to them. It is closely linked to their career plan.

On the other hand, those who take an interpreting class wanted to improve their interpreting skills as they were not able to deliver good interpretations in their part-time workplaces as ad-hock interpreters. Consequently, interpreting educators are encouraged to stress their teaching policy to convey the desired message to prospective students.

キーワード
通訳演習、通訳者、職業、英語力の強化

1．導入

本稿は、英語を専攻する学部生の「通訳演習」の授業に対する志向を調査し、その分析の結果を報告するものである。

大学院で通訳者の養成が行われる欧州とは異なり、日本では伝統的に、専門学校にあたる通訳学校が通訳者の養成にかかわってきている（佐藤 2004）。したがって、日本では大学院や大学が通訳者の養成機関の役割を果たしているわけではない。しかし最新の 2021 年の全国 820 大

学を対象にした調査の結果では、回答のあった 407 大学のうち、62 大学で通訳の授業が実施されており、授業数は 193 であった（高橋ほか 2023）。

前述のように、学部や大学院では、通訳者の養成を行わないのであれば、何を目的として通訳教育が行われているのであろうか。通訳の指導にあたる教員を対象とした調査では、「授業運営に当たって特に重視していること」という質問に対し、もっとも多い回答は「英語力の強化を重視している」であった（染谷ほか 2005、高橋ほか 2023）。

では学部で通訳の授業を受ける学生たちは、一体、何を目的として通訳演習の授業を受講するのであろうか。授業を行う教員と受講する学生との間で、達成目標や授業内容の理解に関して、何か齟齬はないのであろうか。前述のように通訳関連の授業に関して指導にあたる教員を対象とした調査は行われているが、受講生の意識に関する調査は、Takahashi（2017）しか見つけることができなかった。Takahashi（2017）の調査では、関東地方の 2 つの大学の受講生を対象に受講動機や通訳訓練の結果や訓練によってどのような成長があったかをたずねて分析している。その調査からすでに 8 年が経過しており、現状はどのようになっているのか、わかりづらい状況である。

本稿では、外国語を専攻している学生で、通訳に関して概論などを通して学ぶ講義形式の授業ではなく、実際に通訳の演習や実習が中心となっている授業を選択して受講する学生と、またそのような通訳関連の科目を選択しない学生の 2 群に分け、インタビュー調査を実施した。その中で、通訳の授業を選択した理由、あるいは反対に選択しなかった理由をたずねた。この結果に基づいて、通訳演習の授業が学生にはどのように受け止められているのかを分析した。

この調査の結果を今後の授業運営や、カリキュラム計画や、さらには学生への授業に関する情報の伝達に生かすことが本研究の目的である。そしてこの結果を今後のよりよい通訳の授業のあり方を考察する一助としたいと考える。また通訳という技術や通訳の訓練に関する正しい知識の普及に役立てたいと考える。

本稿は、第 1 章の導入の後、第 2 章ではこれまで通訳関連の授業に関して行われた先行研究を紹介する。第 3 章では、研究課題を明らかにし、第 4 章ではインタビュー調査の内容に関して報告する。第 5 章では調査の結果を報告し、第 6 章では結果の考察を行う。最後に第 7 章の結論では、まとめと今後の課題と教育的示唆を述べる。

2．先行研究と背景

まず学部で実施されている通訳教育がどのようなものであるか、ということに関して先行研究で述べられている調査の結果を報告する。それに加えて通訳演習の受講生を対象としたこれまでの調査について報告を行う。

また通訳の授業運営には直接関連しないが、社会における通訳者に対する見方やイメージの

変遷を述べる。これは、通訳者に関してすでに述べられていることが、若年層が将来の職業を考える場合に、何らかの影響を与えていることも考慮した結果、扱うものである。

2.1　通訳教育に関する教員を対象とした調査

通訳関連の授業に関しては、授業を実施する教員を対象とした調査報告が存在する。まず2005年に、「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」（染谷ほか2005）の結果が報告されている。さらにその追跡調査として、同様の項目に関する調査が2022年に実施され、その結果は、「日本の大学・大学院における通訳関連科目に関する全国調査報告」（高橋ほか2023）として発表されている。

前述の追跡調査を実施した前年の2021年は、全国的にコロナ禍に見舞われ、対面の授業が制限されることとなった年である。その結果、通常時ではないことを鑑み、実施する予定であった本来の追跡調査を1年後に延期した。それに代わり、当時導入されたオンラインで通訳の授業を実施する教員を対象として調査を実施し、その結果を「日本の大学・大学院における通訳科目の遠隔授業に関する調査報告」（高橋ほか2022）として発表した。

これらの先行研究の中で共通して報告されていることは、授業運営に際しては、必ずしも「プロの通訳者の養成」を目的としているわけではないということである。例えば2005年の調査の結果では、授業運営にあたり特に重視していることに関する質問で、回答者の38％は語学力の強化だと答えている。それに続き23％は通訳者の養成と回答しているが、それ以外にも異文化コミュニケーション教育（18％）、一般教養・学問（18％）となっている（染谷ほか2005）。さらに2023年の追跡調査では、回答者の49％が授業運営にあたり特に重視していることは「語学力の強化」と回答しており、具体的な数値は報告されていないものの2番目の通訳者の養成との差が前回の調査より大きくなっていると報告されている。またそれ以外にも、同じ順番で異文化コミュニケーション教育と一般教養・学問が続くと報告されている。

また教員が授業中に導入しているアクティビティとしては、逐次通訳の実習以外にも、シャドーイングや、サイトトランスレーションといったテキストを見ながら、同時に順送りで訳出を行う練習やノートテーキングや単語のクイックリスポンスを取り入れていることが調査の結果から明らかになっている（高橋ほか2022、2023）。高橋ほか（2023）によれば、シャドーイングを実施している回答者は全体の81％で、サイトトランスレーションは70％であった（重複回答可）。このように、通訳の実技関連の授業においては、通訳そのものの訓練以外の基礎訓練にかなり比重が置かれていることがわかる。

2.2　通訳演習の受講者を対象とした調査

受講生を対象とした調査では、Takahashi（2017）で通訳演習の授業を受けた関東地方の2つの大学の学生を対象に、授業期間中に3回実施したTerm Sheet（振り返りシート）の分析

とフォーカスインタビューの結果をまとめて報告している。これによれば、通訳演習を受講した学生の受講動機で 1 番多かったのは、「通訳への興味」であった。そしてそれに続くのが、「リスニング、聞く」そして「音声、発音」であった。また受講した結果として、56 人中、13 人はリスニングが上がったと報告している。そのほかにも英語学習やコミュニケーションの取り方に対する意識が変わったとも報告している。調査に参加した学生の中で、通訳を志望するものは 1 人もいなかった。

また別の研究では、通訳訓練によって、英語での発話量が増え、授業の前後では発音とイントネーションに変化が見られたという調査の報告もある（高橋 2019）。日本語の自己紹介を英語に訳す練習を行った学生自らの自己紹介の発話量が有意に増加し、英語母語話者による比較では、受講後の方が発音がよくなり、自信をもって自己紹介をしているという結果が報告されている（高橋 2019）。その後に実施した実験では、通訳の基礎訓練であるシャドーイングを繰り返した後にも同じ結果が見られた（高橋 2021）。

2.3　社会の通訳者に対する見方やイメージの変化に関して

通訳者に関する社会的なイメージの変化が、受講生の通訳演習や通訳に対する考え方や志向に影響を与えている可能性も考えられる。

通訳者に対する見方やイメージの変化に関しては、1964 年と 2021 年の 2 つの東京オリンピックの間の通訳者に対する社会の受け止め方の変遷の調査が報告されている（木村ら、2024）。この調査は、通訳者が活躍した第 1 回目のオリンピックとコロナ禍開始直後の東京オリンピックの間の期間の新聞、雑誌、また『なるにはブック』として知られている『通訳になるには』という指南書に扱われている「通訳」に関して、その変化を調査したものである。『通訳になるには』に関しては 1975 年版から 2019 年版の 4 版に確認できる変化が報告されている（木村ら、2024）。コロナ禍のオンラインの導入により通訳スタイルが大きく変化する前までの調査によるものである。

これによれば、1977 年版では、テレビや記事などの華やかなイメージの「同時通訳者」像が描かれていた。そしてその後、地域社会にまで広がるさまざまな形態の通訳者が紹介されるようになった。2001 年版では、「英語が分かる人が増えている今、これまで以上に高度な通訳が求められる」と記載されており、その後の 2019 年では、「簡単な会話レベルであれば、スマホやタブレットの通訳アプリで対応できる中でも人間にしかできない仕事がある」とある。このように、通訳者のイメージは、「華やかな憧れに近いイメージ」から、近年では「高度な通訳が求められる」と変遷をたどっている。それと同時に、「スマホやタブレットの通訳アプリで対応できる」といった AI の登場が記述されている。

雑誌は、通訳のことがよく取り上げられていた *English Journal* が 2022 年に終刊号を迎えたことが報告されている。また通訳者がよく取り上げられていた『多聴多読マガジン』では、2016

年以降、通訳者に関連する記事が扱われていないと報告されている（木村ら、2024）。

3．研究の課題と調査の目的

日本の大学の学部レベルにおける通訳教育や通訳訓練は、必ずしもプロの育成を目標として行われているものではない（佐藤 2004、染谷ほか 2005、高橋ほか 2023）。前述のように、調査の結果によれば通訳演習の授業において、通訳訓練は英語教育の一環として考えられており、また英語力強化の一助として考えられていることは、明らかである。先行研究では、調査の参加者の中に通訳を志望する学生が 1 名も含まれていなかったという報告がある（Takahashi, 2017）。それにも関わらず、通訳の授業を受講する学生が存在していた。選択の背景には、例えば他の選択科目の数が限られていたり、授業が設定されている曜限の問題なども考えられるが、それでももっとも多い理由は、通訳に関する興味であった。また受講している学生たちは、リスニング力やスピーキング力の面で「英語力の強化」にも期待を寄せていることは調査の結果、明らかになっている。

では、現在、通訳の実技関連の授業を選択する学生は、こうした授業をどのようにとらえているのであろうか。またそのとらえ方が、授業の選択の際に影響を与えているのであろうか。また授業には何を期待しているのであろうか。これらのことを調査することにより、今後の通訳演習の実施の際の参考にしたい。

4．調査

以上の研究課題の答えを得るために、以下の手法でインタビュー調査を実施した。その期間は 2024 年 5 月から 11 月にかけてであった。インタビューの長さは、それぞれ 7 分から 10 分であった。

4.1　調査方法

調査に際しては、半構造化インタビューを実施した。基本的には、全員に同じ質問をたずねたが、インタビューでの回答を受けた上で、さらに関連した質問を付け加えた参加者もあった。

4.2　インタビューの参加者

インタビューの参加者は、合計 16 人で関西地方の大学で、英語を専攻する大学生である。この 16 人は以下の 2 群に分けることができる。

調査時に通訳演習の授業を選択していない学生：8 人（回答者 A から H）

通訳演習の授業を受講している学生：8 人（回答者 I から P）

授業を選択していない学生に関しては、TOEFL500 点以上と条件を設定した（うち 1 名は英検準 1 級保持者）。英語力がある程度、担保されていない場合には、「自分の英語力では、通訳など無理だ」という理由で受講しないであろうと予測し、調査対象としなかった。

参加者の募集に際し、「通訳演習」の授業を受講している学生に依頼を行った。方法としては、学籍簿で番号の上から順番に無作為に 4 人目ごとに依頼し、参加の意思をたずねたところ、全員（6 人）から協力を得ることができた。残りの 2 人は昨年の受講生に依頼した。

通訳演習の授業を受講していない学生に関しては、受講している学生に友人など同等の英語力で通訳演習を選択していない学生の紹介を依頼した。さらにその参加者からまた別の参加者に紹介を依頼した。8 人のうち 4 人は、担当する別の授業の受講生の中で通訳演習を受けていない学生全員に依頼した。返信があった順番でこれらの 4 人となった。

4.3　手続き

インタビューはすべて対面で、1 人ずつ実施した。インタビュー同意書の説明の後、同意書に署名を得てインタビューを開始した。インタビューは IC レコーダーを用いて録音した。実施したインタビューの質問内容は、以下の通りである。

1. 今までにアルバイトなどで、通訳をやったことがあるか？
2. 大学の授業以外に、通訳訓練は受けたことがあるか？
3. なぜ通訳の授業をとることにしたか？もしくはなぜ通訳演習の授業をとらなかったか？
4. 英語は何歳から習っているか？
5. どこで習っていたか？
6. 英語に対してどのように思っているか？（例：好き？うまくなりたい？など）
7. 通訳（の存在）を何で知ったか？
8. 見たことがあるか？
9. どのようなイメージを持っているか？
10. 通訳演習を選択していないまわりの学生は、どのような理由で、とらないと思うか？

5．結果の分析

質問ごとにインタビューを書き起こし、回答の分析を行った。本稿では、研究の課題と直結すると思われる質問の分析を行い、通訳に対してもっているイメージ（質問 9）に関しては、今後の研究で分析を行うこととする。上記の質問の回答を、まとめて以下のように報告する。

5.1　過去の通訳と通訳訓練の経験について（質問 1 と 2）。

これらの質問は、通訳経験の有無が、通訳の授業の選択と関係しているかどうかを探るために行った。

16 人中、11 人の回答者がアルバイト先などで、簡単な通訳をしたことがあり 5 人はやったことがないと回答している。授業を選択している群で 5 人、選択していない群で 6 人が経験したことがあった。ただそのように回答した全員が、回数は数回であり、英語のできない日本人スタッフや店長と日本語がわからない来店者とのやり取りなど、簡単な通訳をやったことがある程度と報告している。

通訳訓練に関しては、全員が大学の授業で履修する以前もしくは以外には通訳の訓練を受けたことはなかった。授業を選択していない回答者は、まったく通訳訓練を受けたことはないことになる。

5.2　英語を初めて習った年齢と教育機関について（質問 4 と 5）。

この質問は、英語学習の年月と通訳に対する志向に何か関連性がみられるかどうかを探るためにたずねた質問である。

16 人中、4 人は幼稚園に入る以前から、英語を習っていた。また 3 人は幼稚園から、8 人は小学校からであった。幼稚園で始めた 3 人のうち 2 人は、途中でやめてまた小学生になってから習っている。小学校からの場合には、学校の正規の授業で習った場合と、個人の塾や英会話学校で習ったという 2 つの学習手段が報告された。また 2 人は中学で初めて習ったと報告している。

5.3　英語に対する思い

英語に対する思いと通訳者になりたい、通訳をやってみたいということの間に関連性があるか否かを探るためにたずねた質問である（質問 6）。

「英語が好き」「英語はすごく好き」「もっとうまくなりたい」「英語を話すと楽しい」といった様々な表現はあったが、肯定的なイメージを抱いている。しかし中には「他の言語がやりたい」や「言語は好き」という回答もあった。また「あまり好きではない」という回答も 1 人あった。

5.4 「通訳」という存在を知った時期とその媒介手段、また直接、見たことがあるか否か（質問 7 と 8）。

いつ頃、どのような媒介手段を通じて通訳という存在を知ったのか、そしてその事実が、通訳の授業の選択にどのような影響を与えているのかを探るためにこの質問をたずねた。

知り合いなどで通訳者の存在があった場合を除き、13 人がテレビで見たことがあったと回答

している。これにはプロ野球で見られるヒーローインタビューなどの際のスポーツ通訳や、海外の俳優やアーティストが来日した際に随行している芸能通訳が含まれる。

5.5　通訳の授業を選択した理由（質問 3 の回答）。

回答は以下の項目に分類することができた。

①　英語力の強化
②　職業への憧れ
③　職業への志向
④　通訳技術の向上
⑤　通訳に対する興味

①　英語力の強化

この項目は、通訳の授業を受講することで、英語力が強化されるのではないかという期待がこめられたものである。これには以下のような回答があった。

「自分の英語力にもつながると思った」（回答者 M）

「実践的な英会話に直結している」（回答者 M）

ただしこれは 1 人の同じ学生からの回答で、このように回答した学生は、他には存在しなかった。

②　職業への憧れ

この項目の回答には、16 人中、3 人から以下のような回答があった。

「英語力が高いというのがイメージだったので、英語力でどこまでできるのかという興味本位で、挑戦してみたいと思った」（回答者 K）

「いろいろな国に人と会話ができて素敵な仕事」（（回答者 M）

「（テレビで見て自分も）やってみたいと思った」（回答者 O）

③　職業への志向

16 人中、2 人からは「通訳者になりたい（から）」という明確な意思の表示があった。

④　通訳技術の向上

この回答はすでにアルバイト先などで簡単な通訳を経験したことがあり、その結果を踏まえて、さらに技術の向上を期待するものである。以下のような回答が 16 人中、2 人からあった。

「実際にアルバイトで体験をしてみて、もっと専門的に学んだらやりがいや達成感が上がると思った」（回答者 L）

「自分がやった機会があった時につたないと思った。プロの通訳とどう違うのかということを知りたかった」（回答者Ｐ）

⑤　通訳に対する興味

16 人中、2 人からは、「興味があった」という回答があった。また 1 人からは、「翻訳関連の授業をとっていたが、そのうちに通訳にも興味を持った」（回答者Ｎ）という回答があった。

5.6　通訳の授業を選択しなかった理由（質問 3 の回答）。

回答は以下の項目に分類することができた。

①　他の専門領域への興味や関心

②　単位数との関連

③　授業と職業との関連性

①　他の専門領域への興味や関心

8 人中、2 人が「興味の対象が、通訳以外の別の分野であった」と回答した（回答者Ａ・回答者Ｃ）

②　単位数との関連

8 人中、2 人からは、「教職の授業があるのでとれない」（回答者Ａ・回答者Ｂ）という回答があった。

③　授業と職業との関連性

この項目の回答がもっとも多く、とっていない 8 人のうち 7 人が回答している。「通訳という職業につかないので関係がない」という回答で、具体的には以下のような回答であった。

「職業として（通訳になろうとは）思っていない」（回答者Ａ）

「英日を交換できるより、現地で生活できるようになりたい」（回答者Ｄ）

「通訳は専門的な仕事」（回答者Ｄ）

「将来通訳の仕事もしないと思っていたから、そちらの勉強はしなくてよいと思っていた」（回答者Ｅ）

「職業と直結したイメージが強く、通訳演習は通訳になるためのものだと思っていた」（回答者Ｅ）

「通訳者になりたい人がとる」（回答者Ｃ・回答者Ｆ）

「職業のイメージとつながっている」（回答者Ｆ）

「就職活動で通訳でその企業に入るということならばよいが、そうでなければ（職業選択の

幅が）狭くなる」（回答者 G）

「正式な場でお金をもらってやることが多いから、意味を取り違えたりしたら重大な責任を持たなければいけないので、とらなかった」（回答者 C）

「選択した」理由の「興味」とまったく反対に「通訳に興味がなかった」（回答者 D）という回答者も 1 人あった。

5.7　通訳の授業を選択しない理由であると想定されるもの（質問 9 の回答）

この項目では、両群のインタビュー回答者に、回答者と同じように比較的高い英語力があるが、通訳の授業を選択していない場合には、どのような理由が推測できるか、または何か聞いたことがあるかということをたずねたものである。回答は以下の項目に分類することができた。

① 履修の負担
② 職業とのつながり
③ 教職との兼ね合い
④ その他

① 履修の負担

この項目に当てはまる回答としては、「大変そうに見える」「一番ハードそうだと思われている」という回答があった。「ちょっと興味があったらとれる科目ではない」（回答者 C）「もっと楽な授業をとった方がいいと思っている人がいるのでは」（回答者 H）という意見もあった。

② 職業とのつながり

「将来にはつながらないので関係ないと考えている（のでは）」（回答者 K）

③ 教職との兼ね合い

「教職の人はとれないであろう」「教職の人はとりづらいかも」（回答者 G）

④ その他の回答としては、「授業が抽選科目だということもあるのでは」「自分が前に出た方がよいと思っている人もいるのではないか」（回答者 N）「翻訳もとらなくてはならないから（通訳にしか興味のない人もいる）。」（回答者 K）という回答があった。

6．考察

本章では、結果の考察を行う。まず授業選択の理由について、考察を行いその後、英語の好き嫌いと英語学習の期間との関係からも考察を行う。

6.1 「通訳演習」の授業選択の理由に関して

6.1.1 「通訳演習」の授業を選択した理由に関して

結果の章で分類した項目に沿って、考察を行う。

まず「通訳演習」の授業を選択した理由を以下のように大別した。

① 英語力の強化 ② 職業への憧れ ③ 職業への志向 ④ 通訳技術の向上

① 英語力の強化

まだ実証研究があまり実施されていないため、学術的な観点からは考察が難しいものの、通訳に必要なスキルを身に着ける上で、英語力の強化は期待できる可能性はある。また通訳演習では、先行研究で述べたように、実際に訳出する練習以外にもシャドーイングやクイックリスポンスやサイトトランスレーションが課題として行われることが多く、授業中に、それらの課題に取り組むためには、必然的に言語の運用が求められる。したがって、授業中のそのような行為そのものに興味を持つ学生が、運用によって英語力の強化を期待しているということもわかる。ただしこの回答はたった1人の学生からしか報告されていない。また通訳訓練により英語力があがるということを聞いたことがあると答えた回答者は、他にはいなかった。

これはTakahashi（2017）の結果とは、食い違っている点である。Takahashi（2017）では、英語力の強化が2番目に多い受講理由であったからである。英語力はすでに十分あるので、英語力の強化はもう望んでいないのかもと考えられるが、実際に英語に対する思いのところで、「もっとうまくなりたい」と複数の学生が答えている。ということは、このような回答者は、通訳演習に英語力の強化が期待できるとは思っていないのではないかと考えられる。

これは先行研究（木村 2024）で述べられているように、英語学習者向けの雑誌などで、以前は「通訳者の英語学習法」などの特集が組まれたり、連載が掲載されたりして、通訳の勉強をすると英語力が強化されると考えられていたのではないかと推察する。ところがある時期を境に、このような報道が少なくなり、また雑誌自体も廃刊となっていることから、通訳訓練がもたらす波及効果の可能性に関しても、あまり知られていないように感じられた。

② 職業への憧れ

通訳者に対する憧れや「かっこいいと思った」「自分もやってみたいと思った」という報告があった。回答者によれば「テレビ番組で海外のアーチストなどが登場した場合に、通訳者を見た」ということであるが、1年生の概論の授業の際にも、実際に通訳者が巧みに通訳をしているような画像などを提示することで、さらに興味を喚起することができる可能性はあるであろう。

ただ『通訳・通訳ガイドになるには』（2001）にも、「英語が分かる人が増えている今、これまで以上に高度な通訳が求められる」と述べられており、こうしたことで従来の2000年以前の華やかなイメージは抱きにくくなり、一層、通訳というものに対して「自分にはハードルが高

い」というイメージを持つ可能性も考えられる。したがって「通訳者への憧れ」も以前ほどでないとも考えられる。

③　職業への志向

回答者の中の 2 人からは、選択の理由として、「通訳者になりたいから」という回答があった。これは先行研究では、65 人中 1 人もいなかったことから、わずか 8 人のうちに無作為で抽出された 2 人が通訳になりたいと思っていることは、偶然でも意味のあることであると考えられる。そのうち 1 人は、「だからこそこの大学に来た」と回答していることから、今後もこの回答者のような受験生のために、「通訳に関して専門的に学ぶことができて、そのための大学院も備えている」ことをさらに広く周知する必要性があると感じられる。

④　通訳技術の向上

通訳技術の向上では、「さらにうまくなりたい」という気持ちが反映されており、この気持ちが受講のきっかけとなっていることは、望ましい展開のように感じられる。その一方、経験していても、さらに訓練を受けてみようという方向に進まないことも多いようである。頻度も多くはなく、簡単にできてしまう程度の内容でもあったのかもしれない。しかし、この経験で終わってしまうことは残念に思われる。また社会に出てから、再び通訳をすることを求められることも予想されることから、さらなるレベルアップを目指して、受講を促したいと考える。

6.1.2 「通訳演習」の授業を選択しなかった理由に関して

「通訳演習」の授業を選択しなかった理由としては、以下のように大別が可能である。

①　他の専門領域への興味や関心　②　単位数との関連　③　授業と職業との関連性

①と②の他の専門領域への興味や関心と単位数に関しては、個人的な志向の問題でもある。特に教職課程をとっている場合には、必要な取得単位数が多いので、それに加えて通訳科目を受講するのは、難しいと思われる。実際に「教職があるのでとれない」（回答者 A、回答者 B）という報告があった。このようなことから、もし制度上、可能であるのであれば、「通訳演習」を教職科目に加えるということも 1 つの案ではないかと思われる。

英語教員として将来、役に立つであろう通訳に関する正しい知識を得ることができ、また将来、AT や ET などの外国人教員とのやり取りの際にも、通訳を学んだ経験が役に立つこともあるであろう。さらに生徒の前で、実際に通訳をする姿を見せることが、生徒の英語学習の動機付けにつながる可能性も否定できないであろう。

③の職業との関連性であるが、本調査の結果からは、「通訳演習」という科目が「通訳者養成演習」と考えられており、「通訳になる人がとる科目」で「通訳にならないので関係がない」と思われていることもあるということが明らかになった。また職業と直結して考えられる傾向が

あり、その際に「通訳の技術は就職と関係ない」という報告があるように、通訳の技術や訓練を狭義でとらえていることが判明した。

前述のように、通訳演習の目的は、必ずしも「通訳者養成」ではないので、目的や到達目標をシラバスに明確に記載するだけではなく、1年次の受講のガイダンスや概論の授業でそのことを力説する必要性が感じられる。

さらにTILT（Translation in Language Teaching）の実証研究はまだあまり進んでいないものの、現時点での研究の成果をもとに、通訳訓練が英語力の強化につながる可能性があることや、座学とは異なるため、実際に運用する機会が多いことも強調するべきであろう。

また通訳の訓練の際には、逐次通訳の練習として、短期的に覚えておく訓練をするが、こうした訓練や、ノートテーキングの手法や、また相手が聞きやすいような訳出の仕方（話し方や伝え方）の訓練が、実生活でも役に立つというようなことを説明する必要があると思われる。

6.2 「通訳演習」の授業の選択と英語に対する思いの関係性

英語が好きであっても、必ずしも通訳演習に興味があるわけでもないということが判明した。また同時に、「英語がもっとうまくなりたい」と思っても、その際に「通訳演習」をとって、英語力を伸ばそうと思うこともあまりないということも明らかになった。これは前述のように、「通訳演習」という授業が職業的な観点からしか考えられていないということである。

6.3 「通訳演習」の授業の選択と英語学習の開始時期

「通訳演習」の授業の選択と英語学習の開始時期の間には、関係性は何も発見することができなかった。小さいころから英語を習っているから英語が好きなのか、好きだから小さいころからずっと学習が続いているのか、そのいずれかの判断は難しいが、そのことが通訳演習を受講してみようということには、つながっていないようである。

6.4 「通訳の存在」と「通訳演習」の選択の関係性

テレビなどで通訳を見た場合に、「かっこいい」と思ったり、「自分もやってみたい」と思うことはあるようであるが、それがどの程度の強い気持ちであるかを判断するのは難しいと感じた。例えば「テレビで見て私もやってみたいと思った」とは言うものの、通訳について勉強できる大学を特に探したわけではなく、入学した大学にたまたま通訳の授業があったということもあるようである。

7. 結論

本研究は、学部の学生の通訳演習の授業に対する志向をインタビューによって調査したもの

である。現在まで通訳関連科目に関して教員対象に行われた調査の結果では、通訳教育といっても必ずしも、プロの通訳を育成する目的で行われているわけではないことが報告されている。多くの教員が考えている通訳演習の授業は、大きな枠組みとして英語力の強化があり、その中に一般的な教養などその他の言語運用以外のスキルの強化があり、核の小さな部分にプロの通訳者の養成があると言えるであろう。その一方で、この調査の結果からは、回答者は通訳演習の大きな枠組みが通訳者養成だと考えていると言える。このことを図にすると以下のように表すことができる（図 1 参照）。

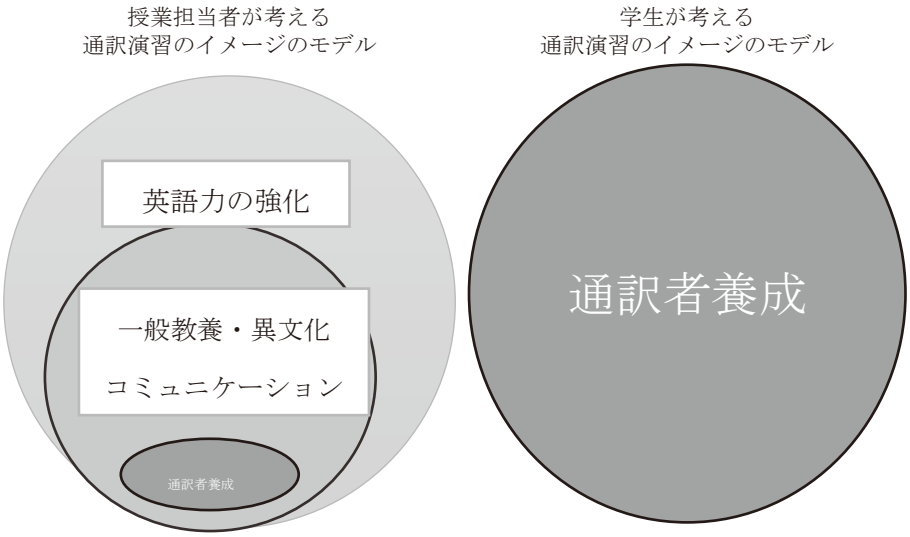

図 1　通訳演習のイメージモデルと学生の通訳演習のイメージ
※ 円全体を「通訳演習」とする。

これは教員と学生のそれぞれが考えている通訳演習に対する基本的な概念が異なっていることになり、この違いを解消しない限り、「通訳訓練＝通訳者養成」と解釈され続けるのであろう。まずその誤解を解くことが重要である。そしてその上で、とりあえず通訳演習を選択し、経験することにより、その真偽のほどはともかく、先行研究の報告にあるように英語力が強化されたと自らが感じて（Takahashi、2017）その感覚を自信につなげることが望ましいのではないだろうか。そしてその後で、通訳という行為にさらに興味を持った場合には、専門的な道を目指せばよいのではないかと考える。いずれにしても、先行研究（高橋 2023）にもあるように、AI の技術の発展にもかかわらず、通訳者は恒常的に人出不足の状況が続いているのである。そのためにも教員側は、このようにして後継者となる若い世代の学生を育成する必要があるであろう。

謝辞

インタビューにご協力いただきました回答者の皆様に、心から感謝申し上げます。

参考文献

エイアイケイ教育情報部編（1988）『通訳・通訳ガイドになるには』ぺりかん社

栗田晃穂（1975）『通訳になるには』ぺりかん社

エイアイケイ教育情報部編（2001）『通訳・通訳ガイドになるには』ぺりかん社

佐藤あずさ（2004）『日本通訳産業研究』博士学位論文　早稲田大学

染谷泰正・斎藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代（2005）「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第 5 号 285–310. 日本通訳学会

木村護郎クリストフ・高橋絹子・内藤稔・西畑香里・岩崎修子（2024）「2 つの東京オリンピックの間の通訳史」日本通訳翻訳学会第 25 回年次大会　神戸・神戸大学

高橋絹子（2019）「日英の逐次通訳訓練によってもたらされる大学生の英語の発話の変化」『上智大学言語学会会報』第 33 号 1–5. 上智大学言語学会

高橋絹子（2021）「通訳の授業が大学生にもたらす影響 ── シャドーイングによる英語発話の変化」『上智大学言語学会会報』第 35 号 8–10. 上智大学言語学会

高橋絹子（2023）「コロナ禍の新たな通訳スタイルで活躍する通訳者たちのその後」『関西大学外国語学部紀要』第 29 号 35–48. 関西大学外国語学部

高橋絹子・大井川朋彦・石塚浩之・稲生衣代・内藤稔（2022）「日本の大学・大学院における通訳科目の遠隔授業に関する調査報告」『通訳翻訳研究』第 21 号 141–162. 日本通訳翻訳学会

高橋絹子・大井川朋彦・石塚浩之・稲生衣代・内藤稔（2023）「日本の大学・大学院における通訳関連科目に関する全国調査報告」『通訳翻訳研究』第 22 号 91–112. 日本通訳翻訳学会

中村正人（2015）『観光ガイドになるには』ぺりかん社

鑓田浩章（2019）『通訳者・通訳ガイドになるには』ぺりかん社

Takahashi, K. (2017). “The impact of interpreter education: what is interpreter training that is conducted at the undergraduate level in japan?” *ASTE Newsletter* No. 65, 61–71.